

被覆栽培の歴史

覆い下茶園

玉露、てん茶用の原料を得る園で、一番茶の萌芽後摘採までの一定期間を、むしろ、わら、本ず、化学繊維資材などで覆って日射をせびり、新芽を軟化させて摘採する。

茶の科学用語辞典 第一版



【成立時期】（1570年代）

・日本教会史： ジョアン・ロドリゲス

「そして使用に供される新芽は、非常に柔らかく、繊細で、極度に滑らかで、霜にあえばしぼみやすく、害をこうむるので、主要な栽培地である宇治の広邑では、この茶の作られる茶園なり畑なりで、その上に棚を作り、葦か藁かの蓆で全部をかこい、二月から新芽の出はじめる頃まで、すなわち三月の末まで霜にあたって害を受けることのないようにする」

【理由（従来）】

- ・ 梶尾の山間の地形が日照時間の短い場所であり、そこに育った”日陰”の茶が良質であると知った
- ・ 茶の木の上に霜除けを目的として藁束または筵を被せたこと